

「源氏百首」－ 源氏倶楽部撰

帖No	帖名	歌No	詠者	和歌	備考
1	桐壺	1	桐壺更衣	かぎりとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり	源氏物語の原点
	桐壺	2	桐壺帝	たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく	桐壺帝の哀惜
2	帚木	3	源氏	帚木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな	方違えの夜
	帚木	4	空蝉	数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木	同上
3	空蝉	5	源氏	空蝉の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな	碁打ち覗き見の夜
	空蝉	6	空蝉	空蝉の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな	同上
4	夕顔	7	夕顔	心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花	夕顔の宿
	夕顔	8	源氏	見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな	夕顔の死 東山にて
5	若紫	9	源氏	見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな	禁断の契り
	若紫	10	源氏	手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草	若き紫
6	末摘花	11	末摘花	からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつつのみ	雪の朝
	末摘花	12	源氏	なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけむ	同上
7	紅葉賀	13	藤壺	袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ	皇子の誕生
	紅葉賀	14	源氏	尽きもせぬ心の闇にくるかな雲居に人を見るにつけても	藤壺立后
	紅葉賀	番外	源典侍	君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも	アラシックス艶熟女
8	花宴	15	源氏	深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ	南殿花の宴
	花宴	16	朧月夜	心いる方ならませばゆみはりのつきなき空に迷はましやは	藤の花の宴
9	葵	17	物の怪	なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま	御息所の絶叫
	葵	18	源氏	あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし中の衣を	若紫→紫の上
10	賢木	19	御息所	神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ	野宮の別れ
	賢木	20	藤壺	このへに霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな	故桐壺帝の宮中を偲んで

11	花散里	21	源氏	橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ	中川の麗景殿邸で
	花散里	22	麗景殿女御	人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ	同上
12	須磨	23	紫の上	別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし	二条院で紫の上との別れ
	須磨	24	源氏	恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん	須磨の秋、源氏の憂愁
13	明石	25	明石入道	ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを	入道の思い
	明石	26	源氏	秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲居をかけれ時のまも見ん	明石に向かいつつ紫を想う
14	霽標	27	源氏	みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな	住吉、明石の上との邂逅
	霽標	28	源氏	降りみだれひまなき空に亡きひとの天かけるらむ宿ぞかなしき	故六条御息所を偲んで
15	蓬生	29	源氏	たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を	荒れた末摘花邸へ
	蓬生	30	末摘花	年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか	待ちわびた源氏の来訪
16	関屋	31	源氏	わくらばに行きあふみちを頼みしもなほかひなしやしほならぬ海	逢坂の関での邂逅
	関屋	32	空蝉	逢坂の関やいかなる関なれば繁きなげきの中をわくらん	同上
17	絵合	33	朱雀院	わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき伸と神やいさめし	前齋宮入内、朱雀院の嘆き
	絵合	34	藤壺中宮	見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をの海人の名をや沈めむ	藤壺御前での絵合
18	松風	35	明石尼君	身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く	明石一家大堰の邸に
	松風	36	源氏	契りしに変わらぬことのしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや	大堰邸にて明石の君に
19	薄雲	37	明石の君	末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見るべき	明石の姫君、二条院へ
	薄雲	38	源氏	入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる	藤壺を痛惜しての絶唱
20	朝顔	39	朝顔の君	秋はてて霧のまがきにむすぼほれあるかなきかこうつる朝顔	難攻不落
	朝顔	40	紫の上	こほりとち石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながるる	紫の上、冷えゆく心
21	少女	41	夕霧	くれなるの涙にふかき袖の色をあさみどりとや言ひしをるべき	六位にして雲居雁を想う
	少女	42	源氏	をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ経ぬれば	五節の少女を懐旧
22	玉鬘	43	玉鬘	初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬ	長谷寺観音のご利益
	玉鬘	44	源氏	恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすぢを尋ね来つらむ	よくぞ育った玉鬘

23	初音	45	源氏	うす氷とけぬる池の鏡には世にたぐいなきかげぞならべる	六条院の新春、源氏最盛期
	初音	46	明石の君	年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ	隣屋敷の姫君に
24	胡蝶	47	紫の上	花ぞののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ	秋好中宮への応答
	胡蝶	48	源氏	橘のかをりし袖によそふればかはれる身ともおもほえぬかな	夕顔の面影、困った父親
25	蛩	49	玉鬘	声はせで身をのみこがす蛩こそいふよりまさる思ひなるらめ	蛩シルエットショー
	蛩	50	花散里	その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつる	好ましき花散里
26	常夏	51	源氏	なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ	夕顔の筋より出でる玉鬘
	常夏	52	近江の君	草わかみひたちの浦のいかが崎いかであひ見んたごの浦波	物語中の最滑稽歌
27	篝火	53	源氏	篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ	何とも断ちがたい恋情
28	野分	54	源氏	した露になびかましかば女郎花あらしき風にはしをれざらまし	雨にも風にも負けぬ恋情
	野分	55	夕霧	風さわぎむら雲まがふ夕べにもわする間なく忘れぬ君	改めて女性に目覚めた15才
29	行幸	56	源氏	をしほ山みゆきつもれる松原に今日ばかりなる跡やなからむ	冷泉帝の美麗なるパレード
	行幸	57	大宮	ふた方にいひもてゆけば玉くしげわが身はなれぬかけごなりけり	すばらしきバイプレイヤー-大宮
	行幸	58	内大臣	うらめしやおきつ玉もをかづくまで磯がくれける海人の心よ	親友・ライバル・政敵、頭中将
30	藤袴	59	夕霧	おなじ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも	姉→他人だったんだ！
	藤袴	60	髭黒大将	数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき	雅の中の野生派、髭黒
31	真木柱	61	真木柱	今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな	髭黒、、家庭崩壊の悲別
	真木柱	62	玉鬘	ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめや	玉鬘十帖の締めくり
32	梅枝	63	朝顔の君	花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや	朝顔の君、薫物合せへの礼賛
	梅枝	64	蛩宮	鶯の声にやいとどあくがれん心しめつる花のあたりに	薫物合せ、唱和。蛩宮の一首
33	藤裏葉	65	後撰集	春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我も頼まむ	内大臣のつぶやき
	藤裏葉	66	雲居雁	あさき名をいひ流しける河口はいかがもらしし関のあらがき	筒井筒の恋の成就、津市白山町
	藤裏葉	67	冷泉帝	世のつねの紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を	物語第一部の大団円終唱
34	若菜上	68	源氏	小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき	源氏四十の賀宴(玉鬘主催)

	若菜上	69	紫の上	身にちかく秋や来ぬらん見るまに青葉の山もうつろひにけり	紫の上の絶望的絶唱
35	若菜下	70	柏木	起きてゆく空も知られぬあけぐれにいつくの露のかかる袖なり	激情に狂った明け方
	若菜下	71	女三の宮	あけぐれの空にうき身は消えななむ夢なりけりと見てもやむべく	女三、はかなげ声にて、、
36	柏木	72	柏木	行方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ	あはれ、衛門督！
	柏木	73	女二の宮	柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿の梢か	まめ男、夕霧物語の始まり
37	横笛	74	源氏	うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける	あのときの桐壺帝の心いかばかりや
	横笛	75	夕霧	横笛の調べはことにかはらぬをむなしくなりし音こそつきせぬ	柏木、ゆかりの笛
38	鈴虫	76	女三の宮	へだてなくはちすの宿を契りても君がころやすまじとすらむ	女三、出家して成長・自立
	鈴虫	77	源氏	心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ	六条院、思い思いの鈴虫の宴
39	夕霧	78	夕霧	山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して	今日はもう帰れない！
	夕霧	79	一条御息所	女郎花しをるる野辺をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ	雲に奪われたいわくつきの手紙
40	御法	80	紫の上	絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを	紫、花散里に名残を惜しむ
	御法	81	紫の上	おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露	紫の上、最後の絶唱
41	幻	82	源氏	大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ	紫の上を痛惜
	幻	83	源氏	もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる	52才、源氏退場(第2首に呼応)
42	匂宮	84	薫	おぼつかな誰に問はましかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ	我が出生や如何ならん
43	紅梅	85	紅梅	心ありて風のにはほはす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき	中君を匂宮に
	紅梅	86	匂宮	花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過ぎまじやは	匂宮(宮の御方がいいんだ！)
44	竹河	87	薫	竹河のはしうち出でしひとふしに深き心のそこは知りきや	大君を慕いて、、
	竹河	88	薫	流れてのたのめむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りなき	大君よ、、世は無情、、、
45	橋姫	89	薫	橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる	大君に想いを
	橋姫	90	柏木	命あらばそれとも見まし人知れぬ岩根にとめし松の生ひすゑ	紙魚・黴、、衝撃の22年前
46	椎本	91	八の宮	われ亡くて草の庵は荒れぬともこのひとことはかれじとぞ思ふ	あわれなり、八の宮
	椎本	92	薫	立ち寄らむ蔭とたのみし椎が本むなしき床になりけるかな	八の宮を偲んで

47	総角	93	薫	あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ	改めて大君に(催馬楽)
	総角	94	大君	山姫の染むる心は分かねどもうつろふ方や深きなるらん	どうぞ中の君にお情けを!
48	早蕨	95	中の君	この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨	父に次いで姉まで、お気の毒に
	早蕨	96	薫	袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる	中チャンは匂宮のお嫁に、、、
49	宿木	97	匂宮	また人に馴れける袖の移り香をわが身にしめてうらみつるかな	匂宮・中の君・薫 トライアングル
	宿木	98	薫	やどり木と思ひいはずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし	弁の尼と宇治の昔をしのんで
50	東屋	99	浮舟	ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬところと思はましかば	最後のヒロイン浮舟の初歌
	東屋	100	薫	さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほどふる雨そそぎかな	大君代、中の君代、浮舟を
51	浮舟	101	浮舟	橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ	物語中随一の歌では!!
	浮舟	102	浮舟	鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝へよ	可哀そうな浮舟
52	蜻蛉	103	匂宮	橘のかをるあたりはほととぎす心してこそなくべかりけれ	おい薫!お前がやったんだろう!
	蜻蛉	104	薫	ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ	はかない世、嘆く薫
53	手習	105	浮舟	はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の杉	匂宮のこと、、薫のこと、、
	手習	106	浮舟	亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる	死にきれず出家、、哀しすぎる
54	夢浮橋	107	薫	法の師とたづぬる道をしるべにて思わぬ山にふみまどふかな	物語最後の歌、それにしても、、